

「降誕会・お釈迦様の恩」

寺子屋プロジェクト和尚の話 第15回：「降誕会（ごうたんえ）」

4月8日は、お釈迦様のお生まれになったことを祝う降誕会です。

お寺では、花御堂の誕生仏に甘茶をおかけする浴仏会をして、報恩の行事をいたします。

「花まつり」と称して稚児行列をして、誕生仏を乗せた御輿を子ども達が引いて町々を巡り甘茶をかける習わしがあるところもあるかもしれません。

竺園寺では坐禅会の皆さんと、「浴仏偈」をお唱えしながら花御堂の周りを巡り、お生まれになったばかりのお釈迦様を模した誕生仏に、甘茶をおかけしてお釈迦様のお誕生を祝いし、私たちが仏教に浴することができる感謝の気持ちを捧げます。

浴仏偈	我今灌沐諸如来	（ごきんかんもしじらい）
	浄智莊嚴功德聚	（じんしそうねんくんていじゅう）
	五濁衆生令離垢	（うずしゅんさんりんりく）
	同証如来浄法身	（ずんしんじらいじんぱしん）

お釈迦様がお生まれになったとき、7歩おあるきになって天と地を指して「天上天下唯我独尊（てんじょう てんげ ゆいが どくそん）」と宣われたとお経にあります。

この「天上天下唯我独尊」というお言葉に山田無文老師は、それは生まれたばかりの赤ちゃんの「おぎゃー」という声が周りの人々に「天上天下唯我独尊」と聞こえたと言います。

待望の赤ちゃんの産声が、待ち望んでいた人たちにそのように聞こえてしまう事は、とても理解できます。

学問的には、花園大学の仏教学佐々木先生は、後世の人たちにとっては仏教の創立宣言であると教えてくださいました。

当時のインド社会は、カーストという階級社会で、生まれの階層によって、その人の人生の価値が決まってしまうのです。

その社会に対し、仏教は、溺れたしまった人にとっての大河の中州のように、救いの場として、その人自身の努力によって人生の価値は変えることができる宗教の場として生まれたということです。

仏教は、努力する宗教として生まれたのです。

そして、「天上天下唯我独尊」は救いの宗教としての仏教の産声でもあったのです。

白隠禅師が大燈国師の語録を採録し評をつけられた「槐安国語」があります。その中で、降誕会の時の問答があります。

降誕会の際、ある僧が師(大燈国師)に「『天上天下唯我独尊』の意味は何ですか？」と尋ねます。

それに対し、師は「お日様が出て天地が輝く。」と答えます。

僧は、さらに尋ねます。「雲門和尚は、『そこに居合わせたらぶったたいて犬にでも投げ与えて天下太平を願っただろう。』と言っています。これはどんな事情でしょう？」

師は答えます。「恩を知ることが、まさに恩に報いるということだ」と応えます。

「それでは、今朝みなで甘茶を注いでお釈迦様のお誕生をお祝いしたのと、雲門和尚のはたらきとは同じですか、異なりますか？」と僧は最後に尋ねます。

師は「千年の田、八百の主という。田地は永年同じだが、持ち主は無数、都度かわる。それと同じく仏道はひとつでも家風はそれぞれ独自。」と諭します。

僧は「和尚様(大燈国師)のおかげで疑問がすべて氷解しました。」と礼拝します。

これに対し師は「それも結構。貴公自身の問題だ。」と応えます。

大燈国師は、お釈迦様がお生まれになって、仏教を開いて下さったお陰で、今私たちが仏の教えの恩恵に浴しているご恩があるとおっしゃったのでしょうか。

「天上天下唯我独尊」のお釈迦様のお言葉は、仏教の「おぎゃー」という産声を仰ぎ聞く私たちの耳が聞かせる、仏教の誕生を讃えるお言葉なのです。

「天上天下唯我独尊」の「唯我」はいわゆる我欲の単なる「我」ではなく、欲も感情も何もかも外界からの刺激で生まれるものではない「本来の自己」に近いものではないでしょうか。

法句経に「おのれこそ おのれのよるべ おのれを措きて 誰によるべぞ よくととのえられし おのれこそ まことえがたき よるべをぞえん」があります。

その「よくととのえられしおのれ」が、「唯我」だと思えるのです。

「唯我」が「よくととのえられしおのれ」だとすれば、己をよく調えるということはどういうことなのか。

私は、「浴仏偈」の3行目「五濁衆生令離垢」、時代や社会、外界からの影響から起こる心の垢を洗い流すことなのではないかと考えます。

臨濟禅師も『臨濟口 示衆』の中で、「但だ外に求むること莫れ」といいます。

自分のものではない思想や考え方、神も仏も自分と一体になっていないものに引きず

りまわされることがないように、凝り固まって自分を見失うことがないようにしたいものです。

それが、また、「独尊」は、「おのれこそ まことえがたき よるべをぞえん」に通じていくとも思えるわけです。

「天上天下唯我独尊」に臨濟禅師の教えの香りを感じてしまうのです。

「千年の田、八百の主」といいます。

お釈迦様の言に臨濟禅師の香りを感じてしまうのは、私の妄想に過ぎないのでしょうか。浴仏偈を唱えながら、誕生仏に甘茶を注いでいる自分をみると、連綿と紡がれていく仏教が、今ここにもあるとも思えるわけです。

お釈迦様のご恩を知ることが、ご恩に報いているならば幸いです。

以上

(蛇足)

和尚さんの引用された白隠禅師の「槐安国語」の「槐安国」は、昔、唐の時代に淳という人が、酔っ払って槐(エンジュ)の木の下で眠ってしまったところ、二人の使者が来て「槐安国」という国に招かれ、国王の娘を娶って南柯という郡の太守になったところ、20年を過ぎ夢が覚めてみると「槐安国」とは、木の下にある蟻の巣のことで、南柯とは、その木の南に向いた枝であった、という話に基づいているようです。

(「槐安国」はインターネット コトバンクから)

ところで筆者はちょうど坐禅会1日前にお彼岸で帰郷していた実家から戻ったのですが、その前日、近所のSさんから、使ってみなさいと「槐」の箸と「黒柿」の箸置きを頂戴しました。その方は八十路を過ぎていますが、箸づくりの名人で東京かつぱ橋道具街のさる商店の紹介か、数年前に北野たけしのテレビ番組に引っ張り出されたこともあります。以前から、私と妻はこの方を秘かに「仙人」「自由(遊)人」と呼んで尊敬していますが、そのSさんが「槐」の箸を下さるときに「槐については、アンタがよく知つとるやろうが。」と言われ、それに対して漢字の読みしか知らない私は生返事を返しただけに終わったのですが、2日後の坐禅会で「槐」の字に出会ったのに驚かされました。

Sさんの箸づくりの真剣の現場はめったに見たことはありませんが、普段はたくさん
の鉢にメダカを育てては人に分けたり、藤袴を植えては渡りの途中に立ち寄るアサ